

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月23日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520351

研究課題名(和文) テキスト、メディア、文化「における/間の」変容・翻訳プロセス——ドイツ語圏を例に

研究課題名(英文) The Process of Transformation and Translation "in" and "in between" Texts, Media, and Cultures--via Example from German-speaking Cultures

研究代表者

山本 浩司 (YAMAMOTO HIROSHI)

早稲田大学・文学学術院・准教授

研究者番号：80267442

研究成果の概要(和文)：

「翻訳」による「文化変容」論を批判的に検討するなかで、オリジナルとコピーという形での序列化を免れた「同時性」(Simultaneität)という現象に着目した。学際的な文化研究の成果を踏まえた多角的な視点に立ちつつ、メディア間については、主に絵画・映像表現と言語芸術の相互作用の分析、言語文化間については、特に日独文化交流の通時的共時的分析を通じて、「翻訳」を理解する上で「同時性」概念が有効であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：

As part of a critical analysis on the cultural transformation theory in the field of translation, the study focused on the phenomenon of "simultaneity" (/Simultaneität/), which has escaped the hierarchical classification between the original and copy. Taking results from interdisciplinary cultural research projects and the variety of perspectives derived from them into account, the study concluded that among media, closely analyzing the interaction between visual expressions, such as in pictures and movies, and literary works appeared to be effective. Furthermore, in terms of language and culture, it became clear through diachronic and synchronic analysis, especially on the cultural exchange history between Japan and Germany, that the "simultaneity" was the key concept in order to understand "translation".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：㊦独文学、㊦書誌学・文献学、㊦文化接触、㊦翻訳学、㊦メディア論、㊦歴史学、

㊦美術史学

## 1. 研究開始当初の背景

ギアツやクリフォード／マークスら文化人類学の議論に触発されて、ドイツ語圏の文学研究・文学研究で注目されるようになってきた「異文化接触としての翻訳」について研究成果（バッハマン＝モディクラ）を出発点としつつ、日本における「翻訳」による「文化変容」の議論（柳父や丸山／加藤）を取り込む一方で、近年のメディア環境の劇的な変化を踏まえて、メディア間翻訳と文化翻訳について日独文化交流史に新しい視点をもたらすことができると考えた。

本研究グループのメンバーの一部は、すでに平成15年度に「文化的形象化（フィギュレーション）」をテーマとして発足した研究グループで経験を積んでおり、そこでの成果を踏まえて、新たに焦点を「翻訳」による「文化変容」に当てることになった。

研究代表者と研究分担者はすでに平成20年に国際シンポジウム『翻訳と文化変容』（早稲田大学）を主催した経験を持っており、内外の研究者や芸術家との共同作業と討議を通じて、見えてきた新たな課題について、ドイツ語圏を例にとりながらも学際的な研究によって多角的に解明していくことを目指して、本研究は申請された。

## 2. 研究の目的

「翻訳」を「文化形成」「文化変容」のためのプロセスとして再定義することを目指した。具体的には

- 1) 文化人類学、ニューヒストリズム、ポストコロニアル批評において「文化翻訳論」に関して用いられてきた概念装置（表象、マッピング、フィルタリングなど）を検証していき、それらの言語間翻訳やメディア間翻訳への適用可能可能性を問う。
- 2) 文化人類学（クリフォードら）、ポストコロニアル批評（バーバ、サイードら）、科学史（グリーンブラット、シービンガーら）の議論を踏まえつつ、異文化接触の場となる「翻訳」と「旅」の関連性について、ドイツ語圏の文学テキストを体系的に分析、検討する。
- 3) 「翻訳」のプロセスにおけるジェンダー要素の果たす役割の解明。翻訳の起点言語と目標言語の双方に通じる翻訳者が二流として「女性化」されてきた意味を批判的に問い直す。
- 4) 翻訳はドイツロマン主義以降の近代文学にあって重要な役割を果たしてきたが、「エクソフォニー（母語の外に出る）」（多和田葉子）が例外的ではなくなってきた今日の状況のなかで「翻訳」の意義の変容を歴史的に検証する。
- 5) メディア間翻訳、文化間翻訳にまで「翻

訳」概念を拡大していくなかえ、隣接概念である「文化変容」との差異を明確化していく。

- 6) 境界領域で創造される文化現象を通じ的分析することで、「ナショナルな文化」の可能性と限界を明らかにしていく。
- 7) 堅実な文献学的な「翻訳論」の伝統に、アメリカ流の「文化翻訳論」が移植され、生産的な議論が展開されているドイツ語圏の「翻訳論」「文化翻訳論」を日本に紹介すると同時に、翻訳による文化変容の議論が早くから行なわれている近代日本の視点をドイツ語圏に対して発信していく。

## 3. 研究の方法

3年間の研究期間の初めに、研究代表者（山本浩司）と研究分担者（濱崎桂子）が中心となり、連携研究者（ルプレヒター）研究協力者（イヴァノヴィッチ）の協力を得て、翻訳学やメディア論などの研究主題に関わるドイツ語の主要文献リストを作成し、そのなかから文学テキスト（ハイネ、多和田葉子、トーマス・クリング、エルフリーデ・イエリネクラ）、理論的テキスト（ベンヤミン、メンケ、レーヴィット、クレマーら）を課題図書に選定し、ほぼ毎月1回の頻度で東京大学文学部や早稲田大学文学部、立教大学異文化コミュニケーション学部などで研究集会を開き、多角的な視点から議論を戦わせ、研究テーマに対する問題意識を深めていった。この議論の過程で、内外の研究文献を渉猟して当初の文献リストを拡大していき、担当者による報告によって、批判的な受容を進めた。こうしたなかで、発信側と受容側とが先進性と後進性などと序列化されやすい「翻訳」や「文化変容」概念に対して、「同時性」という新しい概念が析出してきた。

研究の2年目の2010年12月には、研究会における「同時性」の議論の精密化を踏まえて、研究分担者濱崎桂子の主催によって立教大学で国際シンポジウム「同時性・翻訳」を開催し、ジビュレ・クレマー（哲学、ベルリン自由大学）、縄田雄二（ドイツ文学、中央大学）、ルシアン・ヘルシャー（歴史学、ボッフム大学）ら内外で活躍する一線の研究者を招聘して、「翻訳」概念と「同時性」概念の類縁性と差異性について集中的な討議を行うことで、「同時性」概念の有効性を見定めるとともに、研究グループのメンバーによる口頭発表を含むワークショップを開催し、招聘講師からの批判的なコメントを踏まえつつ、それぞれが問題点の整理に努めた。

研究3年目には、研究成果を論集にまとめるべく、論点の整理と先行研究の批判的な検

証につとめて、研究代表者、研究分担者、連携研究者が、研究集会の場で自らのテーゼをドイツ語で口頭発表していきながら、それぞれ共同研究の成果を世に問う論集に寄せる論文の完成度を高めていくことに努めた。

#### 4. 研究成果

先行文献を踏まえながら、「翻訳」と「文化変容」の関係を検証していくなかで、先進性と後進性、オリジナルとコピーという形で優劣関係に序列化されやすい「翻訳」に対して、「同時性」という新たなキーワードが析出されてきて、それを手がかりにして、言語間、メディア間、文化間の相互作用を研究して行くための端緒が開けてきた。

また翻訳論の理論的研究を踏まえた上での翻訳実践という意味でも、ドイツの小説などを翻訳紹介することができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件)

1) Hane, Reika: Entgleisender Monolog. Inszenierungen des gewaltsamen Schweigens in Kai Hensels Drama *Klamms Krieg*. In: *Schauplatz der Verwandlungen. Variationen über Inszenierung und Hybridität*. Hrsg. von Kazuhiko Tamura unter Mitarbeit von Takeshi Ebine, Keiko Hamazaki, Christine Ivanović, Hiroko Masumoto, Shinji Miyata, Hiroshi Ohsugi und Dieter Trauden. München: iudicium 2011, S. 32-47. (査読なし)

2) Hane, Reika: Wie lässt sich polyrhythmische Kommunizieren in den Geisteswissenschaften gestalten? In: *Lost or Found in Translation? Interkulturelle/Internationale Perspektiven der Geistes- und Kulturwissenschaften*. Hrsg. von René Dietrich, Daniel Smilovski und Ansgar Nünning unter Mitarbeit von Reika Hane, Nicole Krüger und Mirjami Körtvelyessy. Trier: Wissenschaftlicher Verlag Trier 2011, S. 171-182. (査読なし)

3) Hane, Reika: Aichingers Kannibalen. Die Erschaffung der Welt durch Sprache in *Die Schwestern Jouet* – Genesis, kolonialer Diskurs, das Wesen der Sprache (Heidegger). In: *Absprung zur Weiterbesinnung. Geschichte und Medien bei Ilse Aichinger*. Hrsg. von Christine Ivanović und Sugi Shindo. Tübingen: Stauffenburg 2011, S. 113-134. (査読なし)

4) 山口庸子「表現舞踊と精神医学—メアリー・ヴィグマンとハンス・プリンツホルン」『日本病跡学会雑誌』No.79 2010年, 62-69頁。(査読あり)

5) 馬場浩平:「視」の展示思想に関する研究スケッチ—19世紀の公共博物館についての試論のために—『首都大学都市教養学部人文・社会系紀要 人文学報 第435号—独語・独文学』2010年, pp47-65 (査読なし)

6) 福岡麻子「無思考性という悪への抗い——『トーナウベルク』におけるイエリネクの言語的戦略——」, 日本独文学会研究叢書(中村・シュラルブ編)『「悪」の文学史——グリム、ホフマン、トラークル、イエリネクを道標として——』(日本独文学会研究叢書, 第71号) 2010, pp59-75 (査読なし)

7) Ruprechter, Walter: Abendländische und Wiener Kultur – Adolf Loos als Kulturkritiker. 人文学報, 435号, 2010, 67-80頁 (査読なし)

8) 浜崎桂子: "なぜ、ドイツの移民文学を日本で読むのか" 国際シンポジウム「アイデンティティ、移住、越境」報告記録集 科研費 B「世界文学における混成的表現形式の研究」2008-2010年. S.8-14 (2010) (査読なし)

9) Yamaguchi, Yoko: Grace of Movement: An Aspect of the Body Aesthetic in German Body Culture. In: *Viewing Bodies, Reading Desire, Conceptualizing Families. Proceedings of the International Conference "Thinking Gender in Culture"*, Nagoya 2009, 32-39. (査読なし)

10) Fukuoka, Asako: Der Sieg des Kapitalismus und seine Folgen in Österreich. Jelineks Reaktion auf die „Postsozialistische Situation“ in *Raststätte oder Sie machens alle. NEUE BEITRÄGE ZUR GERMANISTIK, BAND 8 / HEFT 1. Internationale Ausgabe von „DOITSU BUNGAU“ (『ドイツ文学』)*, Die Japanische Gesellschaft für Germanistik (日本独文学会) 139, pp63-78, 2009 (査読あり)

11) 浜崎桂子: "Der andere Blick auf Berlin. Zu dem Roman *Selam Berlin*" In : *Language, Culture, and Communication. Journal of the College of Intercultural Communication, Vol.1.* 2009. 159-165 (2009) (査読なし)

12) 古矢 晋一:「身体とメディア — カネッティ『群衆と権力』における「手」の考察について —」 宍戸節太郎編『群衆と権力』の射程 — エリアス・カネッティ再読 — (日本独文学会研究叢書 059)、2009年 49 -63頁 (査読なし)

13) 山本浩司: "「海」と「砂漠」—アイヒンガーとバツハマンにおける非=場所" 『災厄の想起と言語化』イルゼ・アイヒンガーと戦後文学のカノン(日本独文学会研究叢書 060)(山本浩司(編)). 32-46頁(2009) (査読なし)

14) Yamamoto, Hiroshi: "Asseln in einem verwilderten Garten". Katja Lange-Müllers *Westberlin-Roman "Böse Schafe"* Neue Beiträge zur Germanistik Bd.8/H.1/. 113-124 (2009) (査読あり)

〔学会発表〕(計 10 件)

- 1) 山本浩司「住むことの終わり 現代ドイツ文学にみる〈東欧〉」日本西スラヴ学研究会 25 周年記念シンポジウム「中東欧を〈翻訳〉する」立教大学 2012.1.28.
- 2) Yamamoto, Hiroshi: Hunger und Seide. Zu Herta Müllers Roman "Atemschaukel" Sterbensarten der/in der österreichischen Literatur, Tokyo, 2011.11.5.
- 3) Fukuoka, Asako: Ein „Berg von Leichen und Schmerz“. Jelineks sprachliche Strategien in *Totenauberg*. Sterbensarten der/in der österreichischen Literatur, Tokyo, 2011.11.3.
- 4) Rupprechter, Walter: „Sutemi Horiguchi. Ein japanischer Architekt als kultureller Vermittler zwischen Ost und West.“ウィーン工科大学 2011.3.28.
- 5) 福岡麻子「E. イェリネクの „Bild und Frau“ ——描かれる身体と描く身体」、『オーストリア文学会 2009 年度秋季例会』、名古屋、2010.10.16.
- 6) Rupprechter, Walter: „Griechisches Japan: Heimatsuche der Japan-Exilanten Bruno Taut und Kurt Singer.“ (ゲーテ・インスティトゥート及び学習院大学主催「東アジアへの亡命研究会」) 学習院大学 2010.9.18.
- 7) 浜崎桂子: "もうひとつのベルリン-ドイツのトルコ系作家たち" 中東現代文学研究会. 京都大学. 2010.1.24.
- 8) 山口庸子「マリアンネ・フォン・ヴェレフキンにおける絵画と舞踊—予備的考察」第 61 回舞踊学会大会、筑波大学、2009.12.5.
- 9) 福岡麻子「『悪』の意識化——『トーテンアウベルク』におけるイェリネクの言語的戦略」、中村・シュラルプ企画「シンポジウム：悪の文学史——グリム、ホフマン、カフカ、トラークル、イェリネクを道標として——」、『日本独文学会 2009 年秋季研究発表会』、名古屋、2009.10.17.
- 10) 浜崎桂子: "もうひとつのベルリン-「飛び地」から「首都」になった都市の片隅で" 明治大学大学院文化継承学シンポジウム「都市と文学-バリオの文学をめぐる」。明治大学 2009.1.22.

〔図書〕(計 6 件)

- 1) Christine Ivanovic/Keiko Hamazaki(Hg.): Simultaneität – Übersetzen. Tübingen (Stauffenburg) 2012, 総頁数 300.
- 2) アナ・ノヴァック(山本浩司訳)14 歳のアウシュヴィッツ (白水社) 2011, 307 頁。
- 3) ヘルタ・ミュラー (山本浩司訳) 息のブランコ (三修社) 2011, 388 頁。
- 4) ヘルタ・ミュラー (山本浩司訳) 澱み (三修社) 2010, 244 頁。
- 5) トーマス・ベルンハルト (山本浩司訳) 古

典絵画の巨匠たち (論創社) 2010、315 頁。

6) Hiroshi Yamamoto/Christine Ivanovic: Übersetzung--Transformation. Umformungsprozesse in/von Texten, Medien, Kulturen. (Königshausen & Neumann) 2010, 総頁数 241。

6. 研究組織

(1)研究代表者

- i. 山本 浩司
- ii. 早稲田大学
- iii. 文学学術院
- iv. 准教授
- v. 80267442

(2)研究分担者

- i. 浜崎 桂子
- ii. 立教大学
- iii. 異文化コミュニケーション学部
- iv. 准教授
- v. 00336819

(3)連携研究者

- i. 福岡 麻子
- ii. 名古屋市立大学
- iii. 大学院人間文化研究科
- iv. 研究員
- v. 40566999

i. Walter Rupprechter

- ii. 首都大学東京
- iii. 人文科学研究科
- iv. 教授
- v. 50254123

i. 山口 庸子

- ii. 名古屋大学
- iii. 大学院国際言語文化研究科
- iv. 准教授
- v. 00273201

(4)研究協力者

- i. 馬場 浩平
- ii. 首都大学東京
- iii. 都市教養学部
- iv. 兼任講師

i. 羽根 礼華

- ii. ケルン大学
- iii. 哲学部ドイツ語ドイツ文学科
- iv. 博士課程在籍

i. 古矢 晋一

- ii. 慶應大学
- iii. 文学部
- iv. 非常勤講師

- i. クリスティーネ イヴァノヴィッチ
  - ii. ウィーン大学
  - iii. 文学部
  - iv. 客員教授
-